（第３種郵便物認可）　日本歯科新聞　2012年

開業医も幹細胞活用へ

自己骨髄細胞から歯槽骨を再生

幹細胞を用いた最先端の歯槽骨再生治療法が、開業医の診療現場で広がりつつある。東京大学とTESホールディングスが共同開発した治療法「TE-BONE」で、患者自身の骨髄間質細胞から培養骨を作り、インプラント時に不足している骨の再生に使用するものだ。同治療を行った歯科医師からは、操作性が優れているなどの声が上がってきている。

治療の流れは、問診、患者の同意を経た後に血液検査を実施。結果を踏まえ、レントゲン映像などの術前審査が行われる。問題がなければ、血液検査から最短3週間ほどで骨髄穿刺をし、約5週間後に培養骨を移植する。

長谷川歯科診療所（東京都）の長谷川晃嗣氏は、歯根破折後の放置により骨萎縮が起こったと見られる左上顎の6、7番のインプラント治療を施術。上顎洞底の骨の厚みが4ミリもないことから、TE-BONEを実施した。

培養骨の操作性について、長谷川氏は、「培養骨はゼリー状に固まっているため、乾燥が予防できると同時に、上顎洞への補充時に空隙ができない点が良い。繊維状に糸を引く性状なので、今後シリンジに充填した状態で提供したら良いのではないか」と話す。

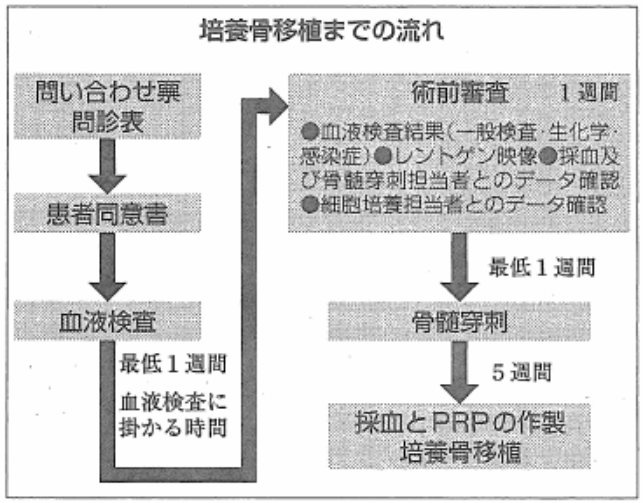
大阪再生医療センター（大阪府）の久保周敬氏も、既に同治療法を取り入れている。上顎洞底の骨の厚みが2ミリしかない患者に対して適用した。

メリットとして久保氏は「培養骨は、PRPと混和されているため、顆粒をそのまま埋め込むより操作性が高い。ゼリー状になっており、0・2ミリリットルごとに小分けされているので、ピンセットでつまんで治療に当たれた」と感想を述べた。

一方、長谷川氏からは「歯根破折の症例の場合、歯槽骨の吸収が局所的に著しいため、歯根破折歯を長期に保存するのが困難であった。TE-BONEでは自家骨を再生できるため、破折部位を修復して温存する新規治療法を確立できると考えられる。また、治療期間の短縮と患者の肉体的負担も低減できるものと思うので、今後、臨床応用できれば」と語る。

TESホールディングスはTE-BONEの導入をサポートしており、昨年末から2回目の提携医療機関の募集を行っている。募集機関数は約15施設。2月12日には導入医療機関責任医師研修会を開催する予定。

問い合わせは☎03（6801）8480まで。



掲載日　2012年1月24日(火)　日本歯科新聞　06ページ